

がん化学療法看護認定看護師研修生の自己の看護実践

パターン認識の支援

ニューマン理論に基づく“仲間同士の対話”という教育実践の試み（パイロットスタディ）

三浦里織(首都大学東京)

今泉郷子(東海大学)

プレゼンテーションの目的：ニューマン理論のもと化学療法認定看護師教育課程の研修生による“仲間同士の対話”という教育プログラムのパイロットスタディの結果をもとに、看護師教育におけるニューマン理論に基づく対話を取り入れた教育の試みへの可能性と課題について検討する。

はじめに：私が所属する首都大学東京は、がん化学療法看護認定看護師の教育を始めて11年、約300名の修了生が全国で活躍している。彼らは、自施設にて、化学療法看護のリーダーとなり、化学療法を受ける患者とその家族の苦悩に寄り添い、セルフケア支援のみならず、生きる意味への問いなど、患者や家族らが置かれた状況全体を視野に入れたより専門的で高度なケアを担っている。

私は、そのような認定看護師としての高度な実践には、看護師としての自分に向き合い、自分を知っていることが必要であると考えていた。そのため、これまでの教育課程では、自己内省の機会や研修生同士の支援グループなどの工夫に取り組んできた。それだけでは、研修生が自己を知り、自己の看護実践のありようを認識し、成長するための機会としては十分ではないのではないかと考えた。

そこで、Margaret Newman（1994/1995, 2008/2009）の健康の理論に基づいて認定看護師教育プログラムを考えてみることは意義があると考えた。Newmanは、人は自身のパターンを認識できれば、そのパターンが現す意味から洞察を得て、あらたに進むべき道を見出すことができると述べている（p.127）。このことを研修生に結び付けて考えてみると、研修生が自己の看護実践のパターンを認識できるならば、そのパターンが映し出している意味から洞察を得て、より高い水準の実践を目指して進むことができることになる。しかし、ニューマン理論のもとにその混沌が成長の機会と知っていれば、さらに認定看護師としての拡張が見られる可能性がある。そして、その対話の機会は、同じように成長したいと考えている仲間同士であれば、互いに呼応し拡張を促せるのではないかと考え、教育プログラムの作成に取り組んだ。

“仲間たちの対話”教育プログラム：

対話の時期は、自己の看護実践に向き合い、自己のあり様を問い直す機会が多い臨地実習の時期を中心に、3回（実習開始時、実習中間のころ、実習修了後）行うこととした。各回の対話の後に、自己の看護実践のありように関する気づきをジャーナルに記載し、次回の対話の際には、前回記載したジャーナルを読み返してから、新たな対話を始めた。

取り組みの実際

実習開始して15日目の頃に、第1回目の“仲間たちとの対話”を行った。新たな環境で孤軍奮闘しているこの時期の研修生たちにとって、仲間たちと語り合える場は、指

導者との関係性や実習環境についての不満や愚痴を吐き出すばかりの場にもなり得る。そのため、この“仲間たちとの対話”を、行うことの目的と意義について説明をした。実習中の看護実践を振り返り、その実践の中に、どのような自分自身のありようが表れているのかということについて対話を促した。指導者を前に萎縮している対話が見受けられ、仲間同士励まされ、互いに頑張ろうとしていた。それ以上の対話が見られる様子はなかったため、私自身対話を深めさせようとしなかった。対話後の研修生が記載したジャーナルは、実習中の自分と指導者や病棟スタッフとのかかわり方が主な内容であり、反省文のように思えた。看護実践のパターンを気づかせるような理論に基づく促しがさらに必要なのだと考え、第2回で、再度、この対話の目的と意義を伝えようと考えた。

実習中間のころに第2回目“仲間たちの対話”の時間をもった。第1回の時の気づきとプラクシスコースでのアドバイスもあり、学習会での講義資料「ニューマン理論に基づく‘ケアパターン’の探求」を用いて、ニューマン理論の基での対話を通して、自己のケアパターンとその意味への理解を深めることが、今後の認定看護師として成長し続ける上で役立つことを伝え、対話へと促した。しかし、対話で語られる内容は、実習場での指導者たちとの関係性に関する気づきに終始していた。私は、看護実践でのパターンの気づきを意識し、それぞれのグループをラウンドしながら、実習中の看護についての対話が促されるように関わった。しかしジャーナルには、常に評価の目にさらされ、緊張感の高い環境に適応しよう、自分が努力しなければならないと自分で自分を追い込み、なんとか課題を乗り越えようと必死にもがく研修生たちのパターンが溢れていた。これらの結果から、研修生同士だけでなく、教育プログラムを遂行している教員もパートナーであることをさらに意識し、研修生に寄り添うことが必要であると考えた。なかなか思い描いたような方向に対話が進み切れていない状況に、教員である私も焦りを感じ、対話をさせるための方法へのこだわりから抜け出せなくなっていた。このとき、プラクシスコースでのアドバイスや参加メンバーとの対話から、研究方法にこだわる私のありようは、研修生だけではなく、きちんとやらなければならないと私自身も評価に縛られているとその意味の洞察を得た。このことから、教育実践に関わる教員自身にも、自己の教育実践のパターンへの気づきを促すパートナーの存在が必要であると考えた。

実習が終了した後に開催した第3回目の“仲間たちとの対話”では、実習を終えた安堵の気持ちとともに、どのグループも笑顔で対話が進んでいた。これまでと変わらず、指導者などとの関係性に終始し、開放的な関係性へと発展できない研修生がいる一方で、自分の人生における意味深い出来事にまで立ち返って語り洞察を深める研修生もいた。研修生のジャーナルをみると、患者との関わりを振り返ることができた研修生は、その関係性の広がりを感じることができていた。一部の研修生らは「知識の詰込みだけではなく、自己のパターンに気づけたことは、今後の認定看護師として活動していくにあたりとても役立つと思う。」と、私に直接語ってくれた。実習終了後レポートには、対話で得られた自己のケアパターンについて論じている研修生もいた。しかし実習環境の中での自分の振り返りにとどまっている研修生は自分のケアのありようには気づけない傾向にあった。

以上より、化学療法認定看護師教育課程に、“仲間同士の対話”を入れ込み、自己のパターンに気づき、その意味への洞察を深め、さらに高度な実践へと進むためには、①ニューマン理論に基づく対話の必要性と今後の彼らの活動における意義を研修生が十分認識できること、②対話で語る内容は、自己の看護実践、つまり患者とその家族への関わりに焦点を当てること、③看護実践を記載するようなジャーナルの様式を工夫すること、④混沌に陥った時の教員や指導者のフォロー体制を持つこと、⑤研修生の継続的なフォローアップすること、が必要なのではないかと考えた。これらをふまえ、プログラムを修正し2回目の取り組みに踏み出すことにしている。